第12回がん患者大集会参加報告書

日　時：2016年10月9日（日）　13時～16時
会　場：メイン会場(秋田)：秋田県児童会館 けやきシアター
（定員750 人）（秋田市山王中島町１-２）
サブ会場(東京)：東京医科歯科大学医学部３号館(３階)
医学科講義室2(東京都文京区湯島1-5-45)
兵庫県民会館３０３号室（神戸市営地下鉄県庁前下車すぐ。
JR元町駅徒歩７分）

プログラム

【開催日時】 2016 年 10 月 9 日(日)　開場:12 時 30 分　開始:13 時　終了:16 時(予定)

【開催場所】 メイン会場(秋田):秋田県児童会館　けやきシアター(定員 750 人)(秋田市山王中島町1-2)
サブ会場（東京):東京医科歯科大学医学部3号館(2階)医学科講義室1（東京都文京区湯島 1-5-45)
①各地がん患者サロン等のサテライト会場へ参加
②インターネット放送・ソーシャルネットワークを利用した個人視聴(スマートフォン視聴可)

【参加対象】 がん患者・体験者・家族・医療・福祉関係者・支援者・がん医療に関心のある方

【お申込み】 裏面をご覧ください

第1部:がん患者・家族、医療者、支援者の取り組み紹介 13:00～14:40　（12:50 より乳がんリハビリ・自己検診「のの字の歌体操」）

①「がんだと言おう！」	武藤陽子氏（乳がん体験者）
②「医師と二人三脚で希少がん治療に向き合う」	近藤セツ子氏（胸腺腫・胸腺がん患者会 ふたつば代表）
③「夫婦で歩み、夫婦で決意」	安岡里江氏＆明雄氏（がん患者と家族のリンクカフェ「あなたのままで」代表）
④「Smile（すみれ）の会と歩んで11年」	片寄喜久先生（市立秋田総合病院 乳腺・内分泌外科科長）
⑤「寄ってみませんか！『おらほの暮らしの保健室 in 秋田大学』へ」	中村順子先生（秋田大学大学院医学系研究科付属地域包括ケアセンター教授）
⑥「医師として患者として'いのち'に向き合う」	中村正明先生（雄勝中央病院院長）
⑦「'ささら舞'で免疫アップ　～民謡真室川音頭にのせて～」	がん患者と支援者たち

第2部:シンポジウム:「がん、新時代を生きる」 14:50～15:40

柴田 浩行先生（秋田大学大学院医学系研究科臨床腫瘍学講座教授）	藤井婦美子氏（秋田県肺がんネットワーク「あけびの会」代表）
橋爪 隆弘先生（秋田県医師会　はしづめクリニック院長）	小坂和子氏（秋田・こころのネットワーク会長・遺族）
菊地 富貴子氏（秋田県看護協会 訪看ステーションあきた 訪問看護部長）	丹藤昌治氏（厚生労働省 がん・疾病対策課 がん対策推進官）
コーディネーター　町永俊雄氏（福祉ジャーナリスト）	（出演者等変更する場合もあります）

第3部:他会場との意見交換 ＆ アピール(厚生労働省、日本医師会等へ) 16:00 終了

担　当：秋田県細胞検査士会
石井　明、石井　孝子、阿部　諒

東京都細胞検査士会
三宅真司、阿部　仁、澁木康雄、
稲垣敦史、忽滑谷昌平、金室俊子
長尾　緑、鈴木美那子、近藤　円、
吉田志緒子

兵庫県細胞検査士会
上岡英樹、高田直樹、山下展弘

第12回がん患者大集会に協力した
東京都細胞検査士会メンバー

●●●東京都細胞検査士会の協力内容●●●
11時50分集合
・会場案内（大学入口～会場までの案内）8名
・受付　2名
・上記協力が終了したのちは聴講参加
●●●●●●●●●●●●●●●

←サブ会場(東京)：東京医科歯科大学
医学部３号館(３階)

私達の集合時間には降っていた雨も、開場時間には止み、事前登録者・関係者を含めて参加者は80名程度であった。メイン会場であった昨年に比べて、参加者は少なかったものの、当日参加者もみられ、参加者は会場内で講演・シンポジウムを熱心に聴講されていた。
東京都細胞検査士会の参加者は10名で、例年とおり、会場案内と受付を担当。会場までの案内は、今年は大学入口から会場までを担当した。最寄り駅から大学までは、他の協力団体が担当。

大学入口から会場の講義室までが分かり難いため、分岐点となる場所に案内板を持って立った。この時に東京都細胞検査士会の黄色いウインドブレーカーが目立ち、黄色い服を目指して進むように案内、主催者からも、毎年分かり易くていいと、声をかけていただいた。また団体名も覚えていただき、少しずつではあるが信頼関係ができている事を実感した。

[主催側のスタッフさんと受付]

第1部の「がん治療最前線～ゲノム情報を用いた個別化医療～」では、遺伝子解析の基本、歴史、治療への応用とその現状を分かり易く説明されていた。分子標的薬剤や個別化医療など、治療効果の上昇や無駄な治療の排除、副作用の回避等のメリットがあるが、遺伝子解析による差別を規制する法律が無い事や、全ての病院で行われているわけではないというデメリットもある。今後治療の選択肢が増え、標準治療に組み込まれる可能性は高いが、その費用や法整備が課題との事であった。

[シンポジウムの様子]

第2部のシンポジウム「患者・家族、医療者、支援者、みな一緒にいきていこう」では、各演者から立場の紹介がされ、その現状や要望・展望が話された。その中で、アメリカでは患者団体と研究者や企業が情報を共有し、新しい薬剤が作られる事もあるとの報告があった。日本ではまだ不足している事であり、今後正確な医療情報を共有し、新しい治療にチャレンジしていきたいとのまとめとなった。
参加者から病理の報告書の開示について質問があり、東京会場司会の筑波大学病院の臨床心理士の方および、細胞検査士会の三宅会長が返答した。

第3部のシンポジウム「がん、新時代を生きる」は、秋田県本会場からの配信を視聴。医師・患者会・家族・訪問看護師・厚労省がん対策推進官がシンポジストとして発言。コーディネーターは元NHKキャスターで現在福祉ジャーナリストの町永俊雄氏。どのシンポジストも熱い想いを発言されており、問題点や今後に向けての行動について明確となったシンポジウムであった。その中で、子供に親のがんを説明する事の大切さがあげられ、これには医療者のサポートが必要であり、子供のがんに対する理解が深まることが重要である事や、地域包括ケアシステムの重要性が印象深かった。秋田県ではがん罹患率が高いものの医師不足であり、患者に寄り添った医師の教育や地域の現状をみた国の施策の必要性、地域に根差した患者会の大切さ、暮らしの中に医療を入れることの大切さがあげられていた。

第4部ではサテライト会場からの意見紹介がされ、そののちにアピール文が採択された。
アピール文は厚労省・医師会・患者に対するアピール文に加えて、全ての人へとして「がんに向き合う社会つくり」も採択された。アピール文は会場で厚労省と医師会に手渡された。
アピール文の詳細は、がん患者団体支援機構のHPから確認していただきたい。

細胞検査士会ががん患者大集会への協力をさせていただいて数年以上経つが、細胞検査士会が協力団体として認識されつつあると感じている。私達はがん患者の方々の意識や環境の変化や願望を知り、さらに参加者には細胞検査士を認知していただけるよう、今後とも主催者の方々と良好な関係を持続するようにしていきたいと感じた。

次回の第13回がん患者大集会は11月26日（日）本会場を東京医科歯科大で開催予定ですので、会員の皆様のご後援、ご協力をお願い致します。

文責　細胞検査士会 渉外委員会
吉田志緒子